



大本山永平寺



眼蔵会

時節の言葉で芒種ぼうしゅと言われる、この季節の永平寺の境内地は、まさに新緑一色に包まれ、深呼吸をすると、まるで体内が洗い清められるような清々しい若葉や、新芽の匂いが山内を漂います。

そうした時期、ここ永平寺では「眼蔵会」と言われる講座が行われます。これは、永平寺をお開きになられた高祖道元禪師が残された、『正法眼蔵しょうぼうげんぞう』を学ぶ講座のことです。『正法眼蔵』とは、高祖さま自身とその教えを受けた弟子の方々により、書物としてまとめられた全九十五巻からなる膨大なものです。したがって当然、その内容は、高祖さまが当時の中国で会得された、正伝の仏法の真理のすべてが網羅されていると言っても過言ではないでしょう。

約一週間にわたる特別講座は、山外から特別な講師をお招きし、厳肅げんじゆに開講の諷経ふうきやうが行われた後に始まります。この講座は、修行僧だけではなく本山の諸役寮、また希望する一般の檀信徒の方々も受講し研鑽を深めます。外からの清涼なる緑風を受け、正伝の仏法を学ぶ。その時の感覚は、時として高祖さまから直接の薫陶を受けているような錯覚にさえ陥る、それがここ永平寺の「眼蔵会」なのです。



大本山總持寺



伝光会撰心と禅カフェ

六月は「伝光会撰心」の月です。これは昭和二十一年に總持寺独住第十七世の渡辺玄宗禪師が私財を投じて始められた行持で、この春に新しく入山した修行僧が初めて経験する本格的な撰心（集中坐禅修行）です。同時に、ご開山瑩山禪師の名著『伝光録』を学び修行する重要な期間でもあります。

『伝光録』はお釈迦さまから連綿と相承されてきた仏祖の系譜と教えを明らかにしたもので、道元禪師の『正法眼蔵』と並び曹洞宗の二大宗典として尊重されており、修行僧たちは六月のじめじめとした蒸し暑い気候の中、ひたすら自己の研鑽に励みます。なお、一般の参禅者も参加することが出来ます。

また、この春よりJR鶴見駅に禅文化を取り入れた「シアル鶴見」という駅ビルがオープンしました。コンセプトは「心身ともに癒される場所と時間」で、總持寺が百年前に移転して以来、鶴見の地に禅文化が根付いていることが背景です。

その五階に「坐月一葉」という畳敷きの茶室、坐蒲が備えられた禅カフェがあります。ここで毎週火曜日と金曜日の二回、坐禅や法話・お茶会などが催され、總持寺のほか鶴見大学・駒澤大学・鎌倉の建長寺・円覚寺が交代で担当しております。

六月の總持寺担当は十一日（火）・十四日（金）・二十五日（火）・二十八日（金）です。お越しくださいますようお願いしております。

※五月号二行目「今月」とは「先月（四月）」の誤りです。お詫びして訂正いたします。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

啓蟄けいちつや二度の命を愛ほしむ

千葉県 鈴木 英子

評 病み抜けた命である。春を迎え大地から這い出す虫たちや空を舞う鳥たち、見るもの、心ふれあう人々も懐かしい。とりわけ蘇った我が身が嬉しく愛しい。

梅祭甘酒を吹き窪ませて

東京都 長谷川 瞳

評 梅の花ころは未だ寒い日が多い。梅見茶屋で頂く熱い甘酒は嬉しい。「窪ませて」に作者の写生の力がある。園の雰囲気とゆとりが見える。お着物姿であろうか。

◆春泥かみずや睡を返す忘れもの 静岡県 渥美ふき子

◆白梅の湯島に渡る婦坂おんなざか 東京都 伊奈 三郎

◆鈍漬なまじの山家に太き軒氷柱 宮城県 鎌田登喜子

◆農校の馬借り祭らしくなる 秋田県 小田篤恭葉

◆三山の見える施設の妻に春 群馬県 山本 俊久

◆病棟に隠れたばこや春の雨 埼玉県 中島 新一

◆冬帽子夢に働く亡き父よ 東京都 斉藤ハルエ

◆ぼんぼりに目覚めし雛の穂やかに 埼玉県 日尾野安子

◆深雪晴今日はふしぎな暖かさ 北海道 川上 初子

◆雛飾る母が一番うれしさう 山口県 糸山 栄子

*選者吟

鮎梁に妙齡の脚出揃ひし

五灰子

*作句小見

高濱虚子の事実小説『虹』は森田愛子、伊藤柏翠共に福井県三国で暮らす結核の二人と、虚子との交流を描いたものです。愛子は才媛で俳句も書も良く出来ました。東尋坊近くの三国町「みくに龍翔館」に愛子の達筆な軸が柏翠と共に展示されています。昭和二十八年四月一日 二十九才没。

化粧して病みこもり居り春の雪 愛子

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

人類の失くししものは何だらう眠れる犬の尻尾がうごく
福岡県 三吉 誠

評 大きな命題から始まった上句に対し、ごくごく身近な犬の姿に場を転換し収める鮮やかさ。その振幅のはざまで、人が失ってしまった原初的なものに想いを馳せる。犬に注ぐ眼差しが限りなく優しいことにも惹かれた。

東京のスカイツリーと満月がけん玉している夜の空あおく
福島県 大槻 弘

評 東京スカイツリーというところを「東京の」と表したのは、作者はその夜空を現実に見ていないから。映像で見た同じ夜、同じ月を仰いでいるのだ。結句の「の」がそう教える。

- ◆降りしきる枯葉積みたる公園の寂しさのせる白い鞆＊
山口県 中井 清子
- ◆ふる里に風の澄みゆく処あり安達太良山は今日も冴えい＊
東京都 鈴木 正作

◆ふる里の風と呼ばれて佇みぬ泥鰌こ捕りて育ちしわたし
静岡県 青山 清子

◆新しく布巾をおろす亡き母の縫ひし麻の葉模様刺子
東京都 長谷川 瞳

◆坊さんは欲のない字を書くんだね額屋に言われ嬉しくなりぬ
兵庫県 河本佐知代

◆冷や汗も汗も流れる甲子園テレビの画面を打球抜けゆく
秋田県 小田篤恭葉

◆好きな人みな先に逝き細き雨語りかくるよ思い出ばかり
三重県 尾上さだ子

◆茂吉忌や久々に繰る『白き山』行間に最上の流れ止まざりふ
三重県 小阪 晋

◆老顔の石の仏の前に立ちひとつ減らして願いをしたり
岐阜県 柚原 重治

◆たくさんの抽き出しを持つ友のいて今日は窓辺でお琴をさらふ
青森県 風間 玲子

*選者詠

爪を切るいとまのなくて時過ぎぬ足袋のなかにてちぢこまる足
ちづ

*作歌小見

今月はふつと口元がほころぶようなユーモアを感じさせる歌がいく首もあり、楽しませていただきました。このような歌の良さは、さり気なさにあるので言い過ぎないことだと思います。心にゆとりをもつて詠いたいものです。

※鞆＊……しゅうせん・ふらここ・ぶらんこなどと読む、春の季語。